

第1章 南伝上座仏教と日本の仏教

藤本 晃

一 「日本仏教」と「日本の仏教」

「南伝上座仏教と日本の仏教」というタイトルは伊東先生が提示してくださったのですが、先生が意識をしておられたのか、おられないのか分かりませんが、二つの仏教のこの言い方が、両方の仏教の真髓を言い表していると思います。

「南伝上座仏教」は、これで全部一つなのです。

スリランカの上座仏教も、ミャンマー、タイ、ラオス、カンボジアの上座仏教も、各地の文化の違いによって表面的な見え方は違うところもありますが、上座仏教はどこでもすべて同じ、一つの仏教なのです。もし「仏教行事を一緒にやりましょう」ということになると、ミャンマーでもタイでもスリランカでもお坊様があちこちから集まって一緒に同じお経を唱えて法要をします。上座仏教のお坊様の数が少ない日本では特にそうなります。たくさんのお坊様に参加してもらおうとすると、一つのグループだけでは足りないのです。パリー語の発音やイントネーションは国によってずいぶん違いますが、お経は同じなので法要はできるのです。

一方、日本仏教はその中でみんなバラバラです。私は最初うっかり「日本仏教」と書いていま

したが、伊東先生が「日本」の『仏教』にしてくださいました。日本の、ありとあらゆる仏教の総称が「日本の仏教」です。「日本仏教」などという確固たる統一的な仏教があるわけではないのです。

日本における仏教は、最初から正式な比丘サンガ(僧伽)としてではなく、なんだかわけのわからないまま数名のお坊様が朝鮮や中国からさまざまに入ってきて、日本の身分の高い女性を尼さんにして始まりました。最初から上座仏教みたいにきちんと出家受戒したとも言えないようなものだったのです。そのごちゃごちゃから始まって訂正されることなく宗派にどんどん分かれていて、やがて江戸時代を過ぎ、明治時代になったときに、突然の廃仏毀釈などのシヨックな変革があったのですから、「どうしよう、どうしよう」ということでますます慌てたような気がします。

明治維新から百五十年経った今でもその混乱が続いているような気がします。日本では仏教は「これが日本仏教だ」という統一的な感じではなく、日本では仏教をよく分らないまま受け入れて、徐々に独自に改変して宗派に分かれて、明治になって上座仏教に初めて接したのですが、あまりの違いに、「さて、これからどうしようか」とまごまごしたまま現在に至っているという感じがします。少し落ち着いて見直していけばいいのではないかと思います。その点で、先生にいただいた「日本の仏教」というタイトルが現状にピッタリ合っていると思います。

日本の仏教の特徴を表す良い例があります。私は浄土真宗の「単立」寺院の住職ですが、この「単立」というお寺のあり方も日本独特だと思います。私は五年前まで日本の浄土真宗(西)本願寺派の住職としてずっと活動をしていたのですが、あるきっかけで単立しました。日本の仏教では面

白い現象がありました、宗派ごとに分かれ過ぎて、ある宗派では別の宗派の教えを学んだり修行したりしてはいけないようなのです。少なくとも浄土真宗(西)本願寺派では浄土真宗以外はやってはいけないという雰囲気があります。

私は、南伝上座仏教も学び修行し、檀家さんや有縁の人々にもお寺で紹介していました。スマナサーラ長老をお招きして瞑想会や講演会をおこなっていました。すると近所の真宗のお寺から、「真宗の寺で他の宗派のことをやってはいけません」と言っ、私を追い出そうとします。私も天の邪鬼ですから、「では、追い出されてあげます」ということで、追い出されて今に至っているわけです。

「浄土真宗(西)本願寺派」という宗派から独立すると、一つの宗派に所属するのではなく「単立」寺院ということになります。住職の私も(西)本願寺派の僧籍を削除され、「単立」のお寺にだけ所属する、これまた妙な根無し草です。上座仏教であれば、一人のお坊さんが一人で活動をしていても、ちゃんと上座仏教に属するお坊さんです。僧籍もあります。どこかで出家して、そのときのお師匠さんが誰で、出家を確認したお坊さんが誰かということまで全部記録に残っていて、一人で遊行しても平気です。二百人、三百人集まって法要をするときは、その中に入れて仲間としてお勤めすることができます。

しかし日本の場合、所属する宗派がなくなってしまうといかにも根無し草みたいになっちゃいます。これも仏教として何か変だなという感じもするわけですが、今日のテーマではあり

ませんので、日本の仏教は「宗派」仏教だということだけお伝えしておきます。

二 何のために比較するのか

「南伝上座仏教と日本の仏教」というと、いかにも両者を比較するようですが、そして実際に比較するのですが、何のために比較するのでしょうか。

単純に両者を比べるだけでも、違いがはつきりしてそれぞれの特徴がよりよく分かるので意味はあると思います。しかしこの両者を比べると、私はちょっと日本の仏教にがっかり感を感じてしまいます。しかしこの両者を比べると、私はちょっと日本の仏教にがっかり感を感じずと守って現代まで続いている、正統にして神聖といえますか、釈尊の仏教そのままだと思います。

一方の日本の仏教は、始まりからして大乘から始まっています。これも「大乘」という宗派があったわけではなく、仏滅五百年後くらいからインドのあちこちで勝手にいろいろなお経ができたところで、一つずつのお経を学ぶグループが少しずつ大きくなっていっただけです。『般若経』を学ぶグループから中観派が出たり、『法華経』を学ぶグループは哲学を発展させずそのままお経だけ学んで、などというふうにならぬように各グループに分かれて、最初から一つの「大乘のサンガ」とい

うものとはなかつたわけです。

各地の勉強会グループのようなものから始まり、それが中国に入つて中国でも同じように各お寺でそれぞれ得意分野を学んで、それを日本がそのまま輸入していますから、日本仏教も最初から、大乘のあれこれのお経を好んで取り入れていくのです。日本で最初の最初にお勤めしていたお経は、やはり、といふべきか、護国を願う大乘經典各種と先祖供養を奨励する『盂蘭盆經』が主だったようです。釈尊の教えから続く正統性という点では上座仏教に対して勝ち目がないわけです。

しかし、そんな大乘經典にも釈尊の教えが埋め込まれてはいます。そのおかげでしょう、なんとなく真理の一端もあるから、日本に入つてきた仏教は経緯はあやふやなのに、何とか現在まで持ちこたえてきているところがあります。その歴史を辿ることによつて、日本人が仏教の何を取つたのか、何を變えてしまったのか、何を捨てたかといふことも分かるうかと考えております。

釈尊以来の正統な教えではないかといわれる上座仏教に、日本人がはじめて本当に生で触れたのは、明治時代になつてからです。そのときに、日本人独特のやり方でうまく取り込めればよかつたのですが、うまくいったのか、うまくいかなかつたのか、その明治以降の日本の仏教史を学ぶことから、日本の仏教の特徴がまた分かると思ひます。

相手を知ること自分で自分を知ることができるとし、自分を知つて相手のことも学べるということ

で、感情を抜きにして相手と自分を謙虚に比較してみることに大いに意味があると思います。

三 仏教の視点から見た日本の仏教史

日本の仏教はスタートから変？

南伝上座仏教と比べる前に、日本仏教史のおさらいをしておきたいと思います。学校で習うようなやり方ではなく、南伝上座仏教に伝わる釈尊の比丘サンガの尺度から見て日本の仏教はどうかという視点から見ていきます。

西暦五五二年ですか、紀元六世紀に、日本に仏教が正式に入ったことになっていますが、その入り方からして、少しおかしいです。仏教の正統な伝承法では五名以上の比丘から成るサンガがその地域に行き、新しい人を出家させて、「あなたも仏教の仲間ですよ、比丘(尼)ですよ」と認定するところから始まります。

しかし、日本の場合は、どうも何人で来たのかもわかりません。一応、正式な出家もしたと言いますが、上座仏教の意味の正式ではなく、日本の政府関係者と当時の朝鮮三国のたぶん百済の政府関係者とで、「はい、お坊さんもこれで認定しましたよ」と独自に出家させた気配があります。どうも最初から比丘サンガの正統性ははっきりしていません。

さらに、最初から日本政府がお坊さんを管理していました。「今年は、お坊さんを何人出家させます」と国が決めてお坊さんを選ぶわけです。見込みのある人を選び、国がお坊さんの数と配置を管理するわけです。しかも出家のさせ方も比丘サンガの出家作法に則っているのかいないのか、どうも怪しいのです。

出家したのはいいですが、お坊さんが公務員のような扱いですから、公務員だと役所が必要で、国分寺や国分尼寺をつくるわけです。「あっちの国分寺に、今年は何名滞在させます」ということも国が決めてしまい、「比丘サンガ」というかお坊さんのグループも自立的なものではありません。そのように変なところから日本の仏教が始まっています。

それでも、出家して勉強をして何か仏教の良いものに触れていくことによって、どうも国の管理のままでお寺の中にもつまらないからと、だんだんと町に出ていくお坊さんもいたようです。奈良時代には大仏建立の勸進に全国を行脚したお坊さんもいましたし、平安時代には、勝手に町に出ていき人々に教えを説いたりする「聖(ひじり)」もいたようです。町で自分で勝手にお坊さんのようなことをする「私度僧」も出てきます。

奈良・平安時代には「南都六宗」という奈良のお寺を中心に大きな六つの宗派(学派)ができて、「このお寺では『華嚴経』を学びます」とか「このお寺では『成実論』を学びます」、「このお寺では『律』を学びます」などと、学派という感じで各お寺の得意分野が出てきました。しかし、それが宗派意識へとつながっていくきっかけではないかと思っています。

「宗派」の成立

既に平安時代でも真言宗とか天台宗が独立してしまい、「南都六宗はいらない」と言っただけで山に入って独自の活動を始めてしまいました。鎌倉時代になると、天台宗からさらに禪宗や浄土系や法華経系の宗派が分派していきます。このときは南都六宗みたいに学問とか学びということを選んでではなく、自分の救い、自分にとつての仏教として選んでいますので、良い意味でも悪い意味でも、宗派としてそれぞれ独立性が強く、他の宗派の人々とは話し合いをしにくくなってきたらうと思います。

そして江戸時代には、その当時までに出来上がった宗派を江戸幕府が認めて固定してしまいました。十三宗ほどを認定して、江戸幕府が公認する宗派はこれだけです。修験道など他のものは公認ではないけれども、人も入れないような山の中で勝手にやっているものは管理できないということも野放し状態でした。江戸時代には、山に入って修行をしている修験者も結構いました。幕府もなかなか管理仕切れません。その修験の人々のなかから忍者のようなものも出てきたりしました。つまり、江戸時代まではまだ完全な中央集権という感じではなく、勝手にやるお坊さんもいたのです。

しかし幕府としては、いろいろと管理下で動くようにさせたかったわけですね。江戸幕府が宗派を確定し、宗派の責任者(各宗派の貫首・門主)が代わるたびに、江戸幕府に挨拶に来させると

いうような管理をしていました。そして、各宗派で自分の宗派の勉強をしなさいと、「学林」をつくることを勧めています。現在の日本の仏教系の宗派の大学は、その江戸時代の「学林」がもとになっています。

幕府は「どうぞ勉強をしつかりやってください」と奨励はするのですが、その奨励の仕方が、釈尊や仏教の根本の教えを学ぶのではなく「あなたの宗派のことをしつかり頑張ってください」という感じで、日本の仏教界が統一するという動きにはならないように気をつけていました。「あなたの宗派の開祖さまは誰それさんですか。ああ、その教えをあなたの宗派のお坊さんがしつかり学んだらいいですね」という感じの勧め方です。そうしますと、宗派はますます固定してしまいますし、他宗派のお坊さんは仲間ではなくライバルになってしまいます。

同じ宗派の中でさえ、真面目に修行していた人々のなかで少し学閥っぽいものが出てきた気配もあります。私は浄土真宗の状況しか知りませんが、もともと真宗は修行をしない宗派ですから、宗派の中で威張ろうと思うと、「あの人は浄土真宗の学林で教えているお坊さんですよ」などというステータスが何となく付くようになってきました。

四 明治日本の仏教は「仏教学」

江戸時代の二七〇年間、のほほど国に守られて自分の宗派のことだけ頑張っていたお坊さんたちが、明治時代になって急に寺から追い出されて寺も廃棄されるような状況に陥りました。明治政府の神道国教化政策に伴って起きた廃仏毀釈きしやくです。「この国は仏教ではいけません。これからは神道になります」ということになって、お坊さんたちも慌てたようです。

しかし、私が一番気になるのは、仏教を「仏教学」にしてしまったあたりが間違いではなからうかと思えます。明治になって西洋から「仏教学」というものが入ってきました。それを日本人がまた喜んで導入してしまったのです。

先に結論のようなことを言いますと、学校のようなところで学びをすると、知識としての教えはよく分かるのですが、仏教の場合は、戒律を守り心清めて修行をして悟りを目指そうという求道がもともとあったはずなのに、大学や学校の学問の場では、「それはちょっと措いておいてください。哲学として知識だけ学んでください」ということになってしまっています。

西洋から「文献研究」が入ってきました。見知らぬ言語による書物を解読して、その内容まで学ぶのです。日本で言えば江戸時代末期の一九世紀の西洋社会に、あるとき突然、サンスクリットや漢文やチベット語の文献がほぼ同時にもたらされました。どうやらいずれも、噂に聞いていたインドの宗教とか仏教に関わるものみたいだと分かって、「仏教ってなんだろう。書かれて

いるものを解読して調べてみましょうか」という知的関心で、西洋で仏教文献の研究が始まったのです。そこからさらに「そのチベット語で書かれたものとこのサンスクリットで書かれたものと関係があるようですよ。内容が似ています。じゃあ、どちらも訳して内容を比べてみましょうか。それぞれ、いつの時代のものでしょうか」などと文献や思想を比較しながら西洋人は研究をしていたわけです。仏教を悟りに導く教えとしてではなく、学問の対象としてやっていたわけです。

西洋で仏教の学問が始まった頃にちょうど日本は明治維新となり、廃仏毀釈によって、日本の仏教界がものすごく驚いたわけです。さて、どうしようかというときに、何とかステータスが欲しかったのだと思います。仏教も学問として成り立つということで、西洋から輸入されたばかりの仏教を、日本の仏教界が取り入れてしまいました。それから現代まで一五〇年経っていますが、日本の仏教は仏教を導いた明治時代から、「宗派」とは別なもう一つ大きな流れが出てきているような気がします。

文献研究は書物の研究ですから、内容を解読して知的に理解したことにはなるのですが、修行や悟りのことはわかりません。悟りや修行法の内容は、特に南伝上座仏教のパーリ語のお経には書いてありますが、それを読んだからといって、悟れるものではありません。みずから実践しないと無理なのです。

自然科学ならば、例えばSTAP細胞を例に挙げますと、本当にできるかどうか実際に追試を

しなければいけません。「同じやり方で私もできました。あちらの研究所でも、同じやり方でできました」とどこでも同じ結果が出て、はじめてそのやり方は正しいと認められるわけです。

仏数学の場合は自然科学ではなく人文科学ですが、同じようにやればいいと思います。例えば、「釈尊が「こういうふうに修行をしたら誰でも悟れますよ」と言っているのですから、お経にそう書いてあるのですから、実際に修行をしてみればいいのです。「ああ、私はうまくいかなかった」「あの人はうまくいきましたね」とか。

しかし明治の日本では、純粋な人文科学としてどうなのかという議論に行き着く前に、「宗教は駄目ですよ。修行とか、悟りとか、大学で考えてはいけません。インド哲学としてなら、帝国大学の講座として認めます」と、当時の文部省(現文部科学省)にも厳密に言われ、それに乗ってしまったわけです。「それでもいいから大学の中に仏教学をねじ込むぞ」という勢いで、当時の仏教界の人々が、学問の世界に、西洋流の日本のエリートの世界に入り込もうとしたのではないかという気はします。

さらに仏教学は、文献学だけではなく「比較宗教学」もやっていました。「仏教ではこのような教えがあります。キリスト教やイスラム教では、このような教えがあります」と比較研究するのです。この比較がまたくせ者なのです。「あの人の言い分と、この人の言い分は、ここは共通していますね、でも、ここは違いますね」だけでは、自分の問題になるのかならないのかという問題があるわけです。

比較をするのであれば、今まで自分がやってきたことが良いのか悪いのかは措いておいて、「あなたが今までやってきたやり方はどうなのですか、教えてください」と、お互いに教え合ったり、学び合ったりして、自分の問題として扱うならば、比較する意味はあると思います。しかし、文献学として、仏教の教えさえ客観的に他人事のように見る中で比較しますから、あまり中身に深く入りませんでした。

そうして明治以降、日本の仏教界から悟りとか修行が急速にしぼんでいったように思えます。もともと「仏教学」を日本に導入したお坊さんや学者の中に浄土真宗系の人が多かったのも影響しているかもしれません。真宗に修行がありませんから。

しかも、明治の日本には西洋から入るものは何でも良いものだという風潮がありました。とにかく西洋から学べということで、日本の従来のもは駄目だという気分が強かったものですから、仏教もそれでやってしまったのだと、私は思っています。

五 もう一つの仏教

ところが、明治時代にもう一つ新しい仏教が日本に知られるようになりました。日本といち早く交流を始めたアジアの国々（スリランカやタイなど）から、「本物の」と言っては語弊がある

かもしれませんが、上座仏教がはじめて生のかたちで入ってきたのです。

少し脇道にそれますが、明治時代の少し前ぐらいから、仏教を文献的に学ぶ学問がイギリスで始まりました。主にイギリスに支配されていたスリランカや東南アジアでも、この時流に乗るか、乗らないかという気配はあったようです。

スリランカでは、もともと仏教を教え学ぶシステムが確立していました。それは比丘サンガのやり方です。最初に六歳か七歳の頃に「沙弥(しゃみ)出家」という見習いとして出家したお坊さんを、正式に戒律で比丘として認められている年齢(二十歳)になるまでに、何とかお師匠さんが育て上げなければいけません。もともとは、各お寺で出家させたら、そこのお師匠さんが教えていたようです。

しかし、そういうマンツーマン式では一人の師匠が一人か二人ずつくらいしか育てることはできません。また、どのお寺の住職も等しく弟子を育てる能力に長けているとは限りません。そこで、いつ頃からなのか私の調べはついていませんが、スリランカでは早くから、子供を「沙弥出家」させたらそのお寺でそのまま教育するのではなく、お坊さんの寄宿学校へ入れることをやっていたようです。「プリウェーナ(Privena)」といいます。そのお坊さん用の仏教学校は今もあります。今は西洋式の勉強の仕方もやっておいて損はないということで、仏教もやりますが、一般の学問もやります。

ですから六歳か七歳で沙弥出家して見習いのお坊さんになり、十五歳ぐらいで還俗してし

まったくとしても、中学校を卒業したぐらゐの教育は授けてもらっていますので、一般社会に戻っても生活をしていけるわけです。しかも学校制度としても、「はい、あなたはピリウエーナの何年までの課程が終わっています。ではあなたは高校一年生に編入させてあげます」という共通の教育システムができています。お坊さんの学校とは言いながら、スリランカでは国を挙げて一般の学校と連動できるようになっています。

仏教系の学校はスリランカでは人気があるそうです。出家しなくても生徒はそこに入って学びたいそうです。日本では仏教系の大学はあまり人気がありませんが、スリランカでは、仏教をきちんと教えてくれる、しかも普通の勉強も教えてくれるということ、仏教学校のシステムがしっかりとできています。

ただし、取りあえず二十歳までで終わりということ、西洋式の大学での仏教の研究という感じにはならなかったようです。それでも、第二次大戦後はピリウエーナから発展して仏教大も二校ほどできています。しかし戦前はまだ独自の仏教の学び方だけで、西洋式の文献学と比較研究の仏教のやり方には乗らなかつたようです。

日本では、西洋式の仏教を取り入れたのです。明治時代に西洋から仏教と、スリランカやタイから上座仏教が知られるようになったのですが、日本では上座仏教は主流にならずに、「仏教」を選んだのです。何しろ世の中も仏教界も「脱亜入欧」の気分が一杯でした。なんとなくみんなアジアが劣っていると思ひ込んでいて、「西洋に追いつけ」という気分が蔓延していて、南

伝の上座仏教のことも伝わってはいたのですが、そちらは選ばれませんでした。

上座仏教では戒律を真面目に守らなければいけませんし、修行もきちんとしなければいけません。戒律も修行も緩々の日本仏教の人々には敷居が高くて敬遠されたのかもしれない。まして、「仏教の学び＝仏教学」となりますと、「いや、アジアから学ぶことはないですよ。西洋風の新しい学問形式で仏教を学びますよ」となってしまうような気がします。

六 戦後の仏教学

日本の仏教は、明治時代に定まったスタイルのまま戦後を迎えました。戦争で負けた国には、勝った国からあれこれ指導が入ります。政治だけでなく宗教や学問も例外ではありません。国家神道やその教育は駄目だと言われたりするわけです。

仏教学に関しては、今までやってきたとおり文献学と比較宗教学で行きましようかと、アメリカのお墨付きを得て、明治時代からのやり方で続けてよいということになりました。日本の学者もそのやり方を少し変えようと思えばよかったです、それどころではありませんでした。戦争中は、外国の学者とまともに交流できなくて寂しかったわけですし、その間に研究も遅れてしまいます。戦後、自由になると、やはりアメリカやヨーロッパに目が行くのです。東南アジア

やスリランカは、戦争に負けたわけではないですが国土が戦場にされて疲弊していました。日本人の目が向くのは、明治維新时期と同じく第二次大戦後もアジアではなく西洋世界だったので。それから七十年。現在でも明治以来の文献学と比較宗教学がずっと続いています。

しかし現在、仏教学自体が少し疲弊しているように思えます。この九月に日本で一番大きい仏教学の研究会に、五年ぶりに行きました。そこでは「仏教学分野になかなか若い研究者が入ってきてくれないね」とか「研究の仕方と同じパターンで寂しいね」などという声が大きかったのですが、一方で、「仏教研究の方法は今後も文献研究と比較宗教学で行こう」と再確認するような発表も多くありました。

仏教学者は、一方では仏教学が老朽化して世間や次の世代から必要とされていないと感じつつ、しかしだからと言って従来のやり方を変更するアイデアもないし、そもそも変更する気もなさそうなのです。

一般の現代人は、自分の心を成長させることとか、少なくとも心の癒やしを求めている、仏教への需要はあると思うのですが、その解決法を仏教学に求めようとしていないようです。日本の仏教学がなぜ求められないかといいますと、明治時代からずっと修行や悟りを捨てて、ただ知識のみの研究をやってきたからだと思います。

しかし仏教学が捨てた修行と悟りが、仏教自体にはまだあるのではないのでしょうか。日本の仏教界は仏教学界に追隨するだけでなく、もう一度、悟りとか悟りに至る修行法をアピールすれ

ばよいのではないかと思ひます。

「仏教にだけ悟りがある」というと、ものすごく威張つた言い方に聞こえるかもしれませんが、これは本当のことです。比較宗教学をやるにしても他の宗教と比較しきれないものが仏教にだけあります。それが悟りと悟りに至る修行です。「この宗教では神に祈ることと救いを得られます」とか「この宗教では社会に対してこういうアプローチをします」などという点では仏教とも比較できると思ひます。

しかし、修行をして悟ることは仏教にしかありませんので、ここだけではどうしても他と比較できないのです。それを比較宗教学では考えてもいなかったかもしれないませんが、仏教だけにある悟りというものを、もう少し仏教(学)者が思ひ出してアピールしたらいいのではないかと思ひます。

ただし、悟りとか修行は、日本にも伝わつた大乘仏教では非常に分かりにくくなつています。大乘経典が釈尊の教えそのものではなく、仏滅五百年も経つてから釈尊の教えを取り入れながらもあれこれ余計なものも混ぜてつくつた書物なので、それを読んで学んであれこれ修行するだけでは、なかなか悟りは分かりません。つまりなかなか悟れません。

明治時代以降に日本に入つた南伝上座仏教のパーリ語の書物ならば、釈尊の教えをほぼそのまま記録していますので悟りと悟りへの道も理解しやすくなります。

西洋から入つた仏教學を私は散々貶してきましたが、学問としては捨てたものではありません。

ん。仏教学者が力を合わせて、仏教学の手法で、南伝上座仏教の典籍をも整理することができたのです。明治時代に上座仏教を実践した人はほとんどいなかったのですが、学問レベルではものすごく頑張つて、第二次大戦が始まるまでにぎりぎり間に合つて、パーリ語の三蔵を和訳した上座仏教の典籍をも含む辞書をつくつたりしました。戦後七十年を経た現在では上座仏教のことも知識として簡単に手に入るほど知られています。

しかし、書物を読んだだけでは、悟りも修行も戒律も、本当には理解できたとはいえません。知識としての理解とみずから実践して「分かった」とか「悟った」ということは、雲泥の差があるのです。「自分は学者だから文献研究だけやりましょう。実践はお坊さんに任せましょう」などと言つてはいられないと思います。仏教を分かるのが仏教学ですから、文献解読や比較研究だけでは理解が及ばないところは、もう一歩踏み込んで、自分で実際にやってみるしかないと思います。

七 実証研究としての仏教学を

学問として見ても、仏教学は人文科学の一員なのですから、「科学」的に研究すべきだと思います。文献を解読したり比較研究したりするだけではどうしても理解できないところは、書いて

あることが本当かどうか追試実験して自分で確かめるしかないでしょう。自然科学なら、他人の実験結果が本当かどうか、そこに示された方法・条件で実験して同じ結果が出るかどうか追試するのです。

人文科学たる仏教学も、釈尊が語った悟りが本当かどうか、釈尊が示した通りの修行方法で学者も追試してみればよいのです。同じ悟りの結果が出れば釈尊の語っていること、經典に説かれていたことは正しいと証明できます。

学問もただやるだけでは意味がありません。自分が成長できるかどうかまで考えてほしいのです。「学問」と偉そうなことを言ってしまうましたが、私は仏教しか知りませんので、仏教に限定します。仏教の場合、それを学んで自分が成長するのであれば学ぶ価値はあります。学んで成長がないような学び方は、あまりよくないという気がします。

西洋から文献研究が入り、南方からパーリ仏典が入り、明治から現在まで百五十年間の文献研究だけで、仏教の知識は格段に増えました。それ以前から、日本では仏教という素晴らしい世界があることが千五百年かけてはつきりと分かっています。仏教は日本の文化にしっかりと根を下ろしています。しかし、それで終わりでしょうか。それだけで満足してよいのでしょうか。

せっかく大乘仏教だけではない、釈尊の元々の教えまで日本にもたらされたのです。文献学や比較研究などの科学的な研究方法も日本にもたらされました。では、もう一歩踏み込んで、人文科学としての仏教学を完遂するべく、次はいよいよ研究者みずからが自分の心身を実験台に

して悟りを目指して修行体験すべきときだと思えます。

自然科学の大発見も、あれこれ逆をやってみたり、遊びでふざけて実験してみたり、意外なことをやってみたりして見つかるものもあります。人文科学というか仏教の実験も、最初から完璧を目指して「まずは家庭を捨てて比丘出家してから」などと身構えなくてもよいと思えます。あくまで実験ですから、東南アジアや日本でもやっている十日間コースの瞑想会に参加するか、一日コースでやり方だけ身体で習うとか、ちよつとずつやってみるので良いと思えます。

どのようにやればいいかと言いますと、日本人の一般的な悪い癖ですが、いきなり100%かゼロ%かで考えなくてもよいと思えます。私も昔はそう考えており、上座仏教の修行はどうてい無理だと尻込みしておりました。しかし完全か無かでは、一歩も進めません。無から徐々に進んでやがて完全を目指すのですから、一とか五とか、ちよつとだけまずはやってみるのでも良いと思えます。

浄土真宗には、いつも100%かゼロ%かどっちかにせよという気配があります。「私のような凡夫、煩惱だらけの人間は、完全な善いことをして自分の力で悟りを開く100%はできないのだから諦めましょう。ゼロ%の何の善行為もできないままです」になるわけです。「ちよつと、ボランティアでもやりましょうか」と誘っても、「そんな善いことをやってはいけませんよ」になるわけです。いつも「百」か「ゼロ」なのです。

そのような気持ちでいるのではなく、上座仏教から学ぼうとか実験してみようとは言って

も、いきなり子どもも奥さんも捨てて出家しなさいというわけではありません。上座仏教の世界では、特に第二次大戦後は、在家向けの修行のやり方も教えてくれています。二泊三日くらいの合宿形式の瞑想会や、日帰り修行のやり方だけ、とにかく教えるということさえやっています。

そういう実践会にちょっと行ってみればいいではありませんか。前の日に酒を飲んで二日酔いで頭が痛いままでも、とにかくやってみればいいのです。「修行している半日の間だけは酒を飲まないで頑張るぞ」と。さすがに修行をしながら飲んでいたら病気です。修行期間中だけは頑張ってみて、終わって「ああ、きついな」と、また酒に逃げてもいいわけですから、ちょっとやってみたらいいと思います。

自分を実験台にして「じゃあ、このやり方をやってみましょうかね」とやってみて、それで「だんだん馴染んできた。私にはこれが向いている」と思えばどんどん進んで、しまいには「出家させてください」と言えはいいのです。お試し期間とかがあってもよいと思います。あまり自分から枠を決めなくてもよいと思います。せっかく西洋流の知識学問も入ってきましたから、そのやり方で、新たに知ることができた上座仏教を、もう一步踏み込んで、「実験」として実践的に学んだらどうでしょうか。

しかも、もう一步踏み込むときに、自分の宗派などをあまり考えないほうがよいと思います。「うちは先祖代々曹洞宗だから、このやり方でないと駄目です、他の教えは……」などと考える

のは要らぬ心配です。同じ仏教なのですから、「今日は、こっちの修行をやってみます」とか、「今日は火渡りやってみます」とか、楽しんでしまえばいいと思います。

自分を飛び込ませて学ぶということです。千五百年来の日本の仏教にも価値はありますが、「宗派」だけは、ちよつと日本の仏教の善くない特徴ですので、そこは忘れて、大乘より厳密な南伝上座仏教を西洋式人文科学で実験するというやり方を、ぜひ試してほしいのです。

日本の仏教と南伝上座仏教が明治に邂逅し、そのうえ、西洋式仏教の方法が日本に入っているいろいろ比較研究して百五十年経ちました。比較研究を経て知識としては解明された南北両仏教に説かれている内容を、次は、私たちがみずから実証する番です。これが現代から将来に向けた仏教学の新たな道だと思えます。

いろいろ大風呂敷を広げましたが、従来の日本の仏教と南伝上座仏教というタイプがだいぶ違う二種類の仏教が、この、何でも貪欲に吸収してしまう日本で出会ったのです。おまけにその両者が出会った明治時代にこれまた新たなもの、西洋式学問方法たる仏教学まで導入されました。それらが良い意味で化学反応を起こして新たな仏教と仏教学の道を切り開いていければよいと願っています。